

大学教職課程における教科教育法に関する実証的研究：

初等算数科指導法における授業研究（模擬授業を含む）の方法と検証

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2016-07-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 上岡, 学 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/203

大学教職課程における教科教育法に関する実証的研究

—初等算数科指導法における授業研究(模擬授業を含む)の方法と検証—

A Study of Teaching Method at the Teacher Training Course in
University
— A Verification of “Lesson Study” at Arithmetic in Elementary
School —

上 岡 学^{*}
UEOKA Manabu

はじめに

現在(2015)、大学における教職課程科目の中で、教科教育法は文部科学省をはじめ、実践力育成を目指している。大学においては、教科教育法の講義は、できるだけ授業研究(模擬授業を含む)を取り入れるよう配慮している。また教科教育法に限らず、教職課程において実践力養成の方向性は以前より高まっている。

一方で授業研究(模擬授業を含む)の講義方法は、各教員により様々なスタイルがある。そこで本論では筆者自身の初等算数科指導法を分析することで、教科教育法の基本的理論とそれに基づく実践的スタイルを検証することを目的とする。

講義における授業研究の方法は、様々なスタイルが存在する。大きく2つに分けて、「模擬授業を含む」授業研究と「模擬授業を含まない」授業研究となる。筆者は、たとえば「模擬授業のこころみは、各教科の教材研究への動機づけの意味をもつ」⁽¹⁾とあるように、従来より模擬授業を重要ととらえている立場である。したがって、本研究においては、筆者自身の講義を分析することを通して模擬授業を含む授業研究のあり方を検証する。

本講義における授業研究は、「事前研究」「模擬授業」「事後研究」の3部構成である。事前研究は、模擬授業実施にあたっての教材研究である。模擬授業は実践実施(45分間)である。事後研究は模擬授業後の45分間で行われる「討論」と講義終了後1週間のうちに各自討論を再検討し、文章にまとめる「レポート」との2つで構成される。

本論では、次の4段階で論を進める。

1. 授業研究3部構成の理論的検証
2. 「初等算数科指導法」の実際
3. 学生の学びの評価の検証
4. 総括

^{*}武蔵野大学教職研究センター

1. 授業研究3部構成の理論的検証

授業研究は、前述の通り、(1) 事前研究 (2) 模擬授業 (3) 事後研究の3部を実施することを基本ととらえる。これらのフレームをベースにして、「算数の授業をどのように教えるか」⁽²⁾を検討するのである。

(1) 事前研究の理論

事前研究はさらに、①教科指導の目標（理論）・内容の確認、②学習指導案の作成、③模擬授業の事前準備の3段階がある。

①教科指導の目標（理論）・内容の確認

教科指導の理論は何かといえは、学習指導要領における目標である。たとえば、算数科でいえば、教科目標（全体目標と各学年目標）があり、指導内容が領域ごとに構成されている。学習指導要領（平成27（2015）年現在）に表記されている教科目標と領域は表1の通りである。算数科の目標を理論的基底として、指導内容は4つの領域と1つの活動を枠組みに構成されている。

表1. 小学校算数科の目標(全体目標)と領域・活動（平成27(2015)年）

(1) 算数科の目標 算数的活動を通して、数量や図形についての基礎的・基本的な知識及び技能を身に付け、日常の事象について見通しをもち筋道を立てて考え、表現する能力を育てるとともに、算数的活動の楽しさや数理的な処理のよさに気付き、進んで生活や学習に活用しようとする態度を育てる。
(2) 算数科の4領域と1活動 (領域) A数と計算 B量と測定 C図形 D数量関係 (活動) 算数的活動

次に教科目標を理論的基底として内容を確認する。たとえば2年生の「かけ算」の指導を考える場合、次の順序で確認する。算数科の目標→2年生算数科の目標→他の単元との関連→かけ算単元の目標→内容構成（単元指導計画）→研究授業（本時授業案）内容検討、となる。

②学習指導案の作成

学習指導案は、日本の教科教育法にとっては、重要な要素の一つである。学習指導案は、計画（指導計画）であり、かつ、研究記録である。計画を立て、授業を行い、学習指導案と実際の授業を対応させて評価を行う。それらは研究記録となり、教育方法向上のための資料となる。

学習指導案を記述するとき重要な参考資料は、①学習指導要領②教科書③教師用指導書④過去の実践記録（学習指導案と授業研究記録）の4つである。中心となるものは、②と③の教科書と教師用指導書であるが、その理論背景となるものが①の学習指導要領であり、実践的背景となるものは④過去の実践記録である。

③模擬授業の事前準備

学習指導案の作成が終わると最終段階として、模擬授業の事前準備がある。教具の作成と模擬授業の練習である。教具の準備に関しては、教材選定において十分吟味していることが重要であり、この段階では作成とその使い方など実践段階となる。ただし、この段階で不具合が見つかることもあり、その場合、教材から見直す必要がある。

模擬授業の練習に関しては、空き時間を利用して、最低1回は実施する。本時の詳細計画をもとに実施し、点検する。そのときの観点は、「授業研究の視点」⁽³⁾などを参考にしつつ、「ねらいは明確か」「伝えたいことが明確か」「評価は可能か」「板書計画は問題ないか」などの主要な観点と「言葉・声量などの言語的側面」「児童とのコミュニケーション的側面」などパフォーマンスの観点との両面から検討を行う。

(2) 模擬授業の理論

①模擬授業の目標

模擬授業の目標は、実際の指導場面を体験し、学習指導案に基づく教育方法を検証しつつ、身につけることである。学習指導案に基づく教育方法とは、算数科の目標と対応しているか、内容は適切か、伝え方は適切かという点である。また、指導方法を身につけるということに限らず、指導方法の考察・検討の方法も身につける。

②模擬授業の方法

前述の目標を達成するための模擬授業の方法は、教育実習における研究授業にできるだけ近い形とする。時間は現行の標準1時間（45分）を行う。TAは実際の研究授業においては、存在する可能性が低い同様な扱いとして教師役1名で行う。また、研究授業同様、うまくゆかなくても途中で止めることはしない。実施時の役割分担も研究授業に近づけ、児童役は約40人、後方で評価する参観教員役を約5名とする。

(3) 事後研究の理論

①事後研究の2つの評価

事後研究に関しては、ブルーム（B.S. Bloom：1968）の提唱した「形成的評価」⁽⁴⁾と「総括的評価」⁽⁵⁾との2段階構えとする。授業後に全体で協議会を開くことで、これら2つの評価を実施する。全体で課題を共有し、改善策を考察し、今後の同単元を行う際の基礎資料とすることで形成的評価とする。一方、担当グループの事前研究と模擬授業から何が評価でき、何が課題かを押さえることでこの時点での総括的評価とする。

②事後研究の方法

事後研究の方法は、授業者+担当グループの自己評価、教師役からの他者評価、児童役からの他者評価をもとに協議を行う。このことによって、様々な視点からの考察が可能となる。そして、最後に講義担当者の講評（総評）を行う。全学生はこれらのすべてを通して1週間の期限内で総合的に再評価を行い、文章でまとめ、レポート作成を行う。

2. 「初等算数科指導法」の実際

(平成27(2015)年度「初等算数科指導法」講義記録)

初等算数科指導法は、小学校教諭免許取得のための半期必修科目であり、現在は16回(2単位)の科目である。そして同様な教科科目として「算数」が存在する。その違いは、「算数」はより広く理論や一般的教科教養として教育全般の中での基礎的内容の修得を目指し、「初等算数科指導法」はその基礎の上で、より限定的に小学校算数における指導法を身につけることを目指している。したがって、講義科目ではあるが、模擬授業を行うことが望ましいと考えられる。

第1回講義：小学校算数科の目標と内容と教科書について

教科教育法を講義するための概要として、教科自体の特質を論じる必要がある。それは学問としての体系であり、初等算数科指導法であれば「数学」の体系である。したがって、初等算数科指導法の講義においては、数学体系を元に作成された学習指導要領を検討する。学習指導要領の体系を扱うことで、教師にとって必要最小限の数学体系を学ぶことができる。

学習指導要領における教科の目標は、その根幹であり、繰り返し確認する必要がある。そして、教科目標の下位目標として各学年の目標があり、目標に対して内容が対応していることを構造的に確認する。その内容を具体化した教材が教科書である。したがって、講義において、教材として学習指導要領と教科書は必須であると考えられる。また教科書には教科用指導書があり、授業案検討段階では重要な参考文献である。

第2回講義：小学校算数科における学習指導案について

(1) 学習指導案とは何か、そして、なぜ必要なのか

「学校教育は、いうまでもなく意図的・計画的に展開されなければならない」⁽⁶⁾、その意図的・計画的な展開の中核に学習指導案は存在する。学習指導案とは何かといえば、授業計画書である。例えば、演劇(授業)における役者(教師)にとっての台本(学習指導案)である。学習指導案を作成し、学習指導案に基づいて授業を実施し、授業後は学習指導案と授業とを対応させて評価と改善を行う。学習指導案が存在することによって、評価と改善はスムーズに行われる。同時に記録となり、同一単元の授業を実施するときの基礎資料となり、授業研究の深化と効率化が可能となる。

(2) 学習指導案の作成方法

学習指導案の作成方法は、まず模範的学習指導案を研究する。模範的学習指導案は、各教育委員会が模範例として冊子等で示しているものやインターネットに掲載されているものなどがある。その中で利用可能なものを研究する。

学習指導案の書式に関しては、唯一の形式があるわけではないが共通する要素はある(書式に関しては、履歴書に例えられる。履歴書は唯一の形式が存在するわけではないが押さえるべき共通の要素がある。その点で学習指導案と同様であるからである)。押さえるべき重要な要素は表2の通り5つある。

表 2. 学習指導案の構成要素

- | |
|---|
| ①記録としての日時、場所、内容
②単元内容に関する目標や指導観
③評価規準
④単元指導計画
⑤本時の詳細計画（目標・展開・評価）
⑥板書計画 |
|---|

(3) 学習指導案の原案作成課題

学習指導案の目的・内容・作成方法を習得した段階で次回までの課題として、各自作成希望（学年・単元ともに任意）の単元について学習指導案細案を作成し、持参する。

第 3 回講義：学習指導案検討の実践研究（グループワーク）

各自作成してきた学習指導案の検討をグループワークとして行う。グループワークは、次の手順で行う（表3）。

表 3. 学習指導案検討のグループワーク手順

- | |
|---|
| (1) 各自のプレゼンテーション（5分×3人＝15分） <ul style="list-style-type: none"> ・後で検討を行うので聞いているものは、そのためのメモをとる ・グループは、同一の机（3人掛）に同席している3人で行う ・各自5分で次の内容についてプレゼンテーションを行う ・プレゼンテーション内容 <ul style="list-style-type: none"> ①どの学年・単元の何時間目を取り上げたか ②単元の特徴と指導内容は何か ③単元計画 ④本時の目標・展開・評価 ⑤板書計画 ・これを3人が交代で行う |
| (2) 各自の課題を検討（5分×3人＝15分） <ul style="list-style-type: none"> ・各自の学習指導案の検討、修正 ・一人5分で交代で行う（全員で15分） ・各学習指導案に朱筆を入れる |
| (3) 次回までに修正版作成・持参・提出 <ul style="list-style-type: none"> ・今回の議論をもとに、次回、修正した学習指導案を作成し提出する |

第 4 回講義：授業研究（模擬授業を含む）の方法とグループ分け

授業研究についての方法は次の表4の通り5段階とし、レベル1～5とする。レベル1事前研究（教材研究・学習指導案）：レベル2事前練習：レベル3模擬授業：レベル4検証：レベル5レポートである。

レベル1以前の準備段階として、グループ分けを行う。できるだけランダムになるように教員があらかじめ決定しておく。そして10グループを発表したところで担当学年を決める。10グループの内訳は、1年2年を1グループずつ、3年以上を2グループ行うことで10回とする。順番は1年生から順次行う。ただし、3年以上を2回行う方法は、3年～6年を1回ずつ行った後、再度3年～6年とする。なぜならば、同一単元を行う場合があるので、時間をあけた方が客観的に比較できるからである。各グループの代表者がじゃんけんを行い、勝った順に実施したい学年を選択する。1年生については2週後と準備にあまり時間を割けないことを周知しておく。

レベル1としてはここからがスタートである。今回は授業時間内で検討を行うので、各グループごとに何を準備してくるか相談する時間を設ける。さらに授業時間内で相談できるのは、次回のみであるので、それ以外はグループごとに時間を設定するよう説明する。

この後、各グループは、模擬授業実施日までに、レベル2まで完了しておかなければならない。

表4. 授業研究の方法 (50人クラス)

(0) 準備 (指示)
①全10回を行うことを指示
②グループを10に分ける (1グループ5人)
③授業グループ以外は、1グループが教員役となる (教員役として後方で起立して教員目線で観察する)
④残り8グループ児童役 (約40人) となる
(1) レベル1 (事前研究)
①教材研究
②学習指導案作成
③教具作成
④役割分担
(2) レベル2 (事前練習)
※ 授業時間外 (各グループで自主的に調整し、実施する)
①部分練習・検討
②全体練習・検討
(3) レベル3 (模擬授業本番実施 (45分))
①準備: 学習指導案印刷、教具準備、座席設定
②実施: 模擬授業本番
(4) レベル4 (検証)
①自己評価、他者評価1 (教師役)、他者評価2 (児童役)
②全体討論
③講義担当者講評
(5) レベル5 (レポート)
①各自次回にレポートをA4・1枚作成し、2部用意する
②1部を授業者 (授業グループ) に提出・1部を教員に提出する

第5回講義：(1) グループごとの検討と授業外の計画・(2) 教育実習生の学習指導案と授業

(1) グループごとの検討と授業外の計画

1週間の準備を経て、グループごとの検討を行う（レベル1）。授業内でのグループごとでの検討は、1回のみである。（授業内では1回も行わないという方法もあるが、検討方法の指導が行えないので必要最低限として1回行う。）

どのようにグループで検討を行えばよいか、どのような点が話し合いのポイントか実際にリアルタイムで行うことで学生への指導が実施できる。しかし、2回以上行わない理由は、授業は指導方法を講義するために用意された時間であり、話し合いのために多くの時間を割くことではないと考えるからである。また、もし今後の話し合いでわからないことが起こった場合は、オフィスアワーに相談にくるよう指導することで学生への指導は可能である。

学習指導案の印刷については、模擬授業グループが、当日授業前日までに学習指導案を担当教員（筆者）までに提出することを伝える。

(2) 教育実習生の学習指導案と実際

後半の45分で実際に教育実習生が研究授業のために作成した学習指導案とそれに基づいて実施した授業DVDを対応させながら視聴する。学習指導案をたどりながら、学習指導案通りに進めることができるのか、また、学習指導案にない発言や展開はどこでどのように起こるのか、目標はよいか、目標と内容が対応しているか、評価はどうか、板書はどうか、など様々な角度から検討することを学ぶ。

第6回講義：模擬授業第1学年（模擬授業1回）

(1) 授業研究の構成

模擬授業1回目（レベル3）である。そのため、出席確認後、冒頭で5分程度確認の説明を行う（表5-(1)）。学習指導案は後方の教員役と担当教員と授業グループのみに配布し、児童役には授業終了後に配布する旨を伝える。教育実習の研究授業と同様に行うこと。時間は45分で途中で止まることはないこと。後方には、教員集団が教師の目線でチェックすること（「見る」ではなく「観る」⁽⁷⁾）。児童役はその学年になりきること。授業グループは、前方横で授業グループとしてチェックを行うこと。模擬授業は、合図とともに教師役の礼で始める。

模擬授業45分が終了する（グループ内でタイムキーパーを設定しているが、念のため教員も独立して計測しておく）と再び教師役の礼で終わる（表5-(2)）。時間が早く終わることもあれば長くなることもある。長くなる場合は、実際の現場同様、5分以上延びた場合は打ち切る。

終了と同時に授業グループが児童役に学習指導案を配布する（表5-(3)）。その間、およそ3分程度ではあるが、授業者には、一息取らせつつ3分程度の自評（自己評価）を考えさせる。学習指導案配布終了後、児童役には数分ではあるが、学習指導案の本時の部分を先ほどの模擬授業と比較しつつ確認させる。

その後は、いわゆる「授業研究会」⁽⁸⁾となる。自評を3分程度で行った（表5-(4)）後、授業グループから一人一言ずつ意見を発表させる（1人1分程度全員で5分以内）（表5-(5)）。続いて、教員

役グループから教員の目線から同様の発表を行わせる（全員で5分程度）（表5-(6)）。児童役から意見、感想、質疑を行わせる（10分程度）（表5-(7)）。最後に担当教員から講評（10分程度）を行い終了とする（表5-(7)）（レベル4）。

レポート（レベル5）は、これらすべてを含めてもう一度各自整理してA4（40字×30行程度）1枚にまとめて作成してくる（1週間後に2部用意して前述の通り提出）。レポート分量を1枚に限定する（表5-(8)）。これは考えをまとめる一つに手法として大切にす。10枚記述したいことがあっても1枚にまとめる。制約に対応できる力を育成するためである。同時に1枚レポートに表紙は不要であることを指示する。毎週行うレポートで、表紙を作成する時間を節約し、内容に集中させるためである（ホチキスも不要となる）。

表5. 模擬授業実施日の流れ（90分）

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none">(1) 事前確認事項（5分）(2) 模擬授業実施－終了（45分）(3) 学習指導案配布・確認（5分）(4) 授業者自己評価（3分）(5) 授業担当グループ意見・感想（5分）(6) 教員役グループ意見・感想（5分）(7) 児童役グループ意見・感想・質疑（10分）(8) 担当教員講評（10分）(9) 連絡（2分） |
|---|

1回目のレポートは、2回目の授業終了後に回収する。1部は前回の授業者（授業グループ）へ、もう1部は担当教員へと指示を出す。また、今後同様の提出の仕方をするよう周知する。

第7回講義：模擬授業第2学年（模擬授業2回）

授業方法は、第6回と同様である。レポートの提出方法は、講義終了時に1部を講義担当者に提出し、1部を前回授業者（授業グループ）に提出する。

第8回講義：模擬授業第3学年A（模擬授業3回）

授業方法は、第7回と同様であるため割愛。

第9回講義：模擬授業第4学年A（模擬授業4回）

授業方法は、第7回と同様であるため割愛。

第10回講義：模擬授業第5学年A（模擬授業5回）

授業方法は、第7回と同様であるため割愛。

第11回講義：模擬授業第6学年A（模擬授業6回）

授業方法は、第7回と同様であるため割愛。

第 12 回講義：模擬授業第 3 学年 B（模擬授業 7 回）

授業方法は、第 7 回と同様であるため割愛。

第 13 回講義：模擬授業第 4 学年 B（模擬授業 8 回）

授業方法は、第 7 回と同様であるため割愛。

第 14 回講義：模擬授業第 5 学年 B（模擬授業 9 回）

授業方法は、第 7 回と同様であるため割愛。

第 15 回講義：模擬授業第 6 学年 B（模擬授業 10 回）

授業方法は、第 7 回と同様であるため割愛。

第 16 回講義：授業研究のまとめ

授業最終回として本講義で行った授業研究の方法論をまとめる。授業とは、教科ごとの目標があり、その目標に則った内容がある。それらの理論は、学習指導要領に記述されている。そして、その内容に対応した具体的指導内容が提示されているものが教科書であり、その教科書にしたがって授業が存在する。そして、その授業を單元ごとに内容を構成し、作成し、実施する主体が教師である。教師は、事前研究として単元を研究し、授業を研究する。そして、それらを学習指導案として作成し、記録として残す。本番の授業では、学習指導案をもとに実施し、記録をとる。事後研究としては、まず自己評価がある。その上で他者評価を検討し、反省と課題と改善策を探る。これらの基本骨子が授業研究の基礎であることを確認してまとめとする。

3. 学生の学びの評価の検証

最終講義を終えた後、記述式で授業後の感想（講義に対する記述的評価として）を 5 行程度記述させた。そこでこの評価は次の 5 つに集約できた。ここでは、項目ごとに学生の評価を要約して引用する。

(1) 模擬授業の時間が 45 分ということ

- ・一部ではなく 1 時間分（45 分）をすべて行うことで、流れがつかめたり、児童の 45 分の動きがわかった。
- ・時間と児童の集中の関係がわかった。（「後半は集中力が落ちる」等）
- ・時間と内容量の関係がわかり、45 分実施する意味が理解できた。

(2) 事前研究のグループ協議が円滑にいったこと

- ・事前研究の方法を指導されたのでグループ協議が円滑にできた。
- ・グループ協議がたくさんできたので模擬授業に対するモチベーションが高くなった。
- ・グループ協議を自主的にたくさん行ったので学びが多かった。

(3) 立場（視点）を複数持つこと

- ・ 授業者、担当グループ、児童役、参観教師役、講師（講義担当者）という立場の視点を持つことができた。
- ・ 様々な角度から考えることができた。
- ・ 順番ですべての立場に立てたのでどのように視点を持つかわかった。

(4) 模擬授業後に全体で協議すること

- ・ 模擬授業直後の全体協議は様々な意見が出され勉強になった。
- ・ 全体で協議することで、どのような授業がよいのか、深まり、共有できた。
- ・ 最後の講義担当者からの講評は、学生が気づかないポイントを指摘され勉強になった。

(5) 1週間後にレポート1枚作成すること

- ・ 毎週レポート1枚はきつかったが、そのおかげで様々な意見や考えを冷静に考え直し、文章化することで整理ができた。
- ・ いろいろ書きたいことがあったが1枚限定なので優先順位や要約ができるようになった。
- ・ 1週間という期間があったので頭の中でまとめ上げる時間ができた。
- ・ 自分たちが授業の時のレポートを全員の人からもらうことでみんなからたくさんアドバイスをもらえ、勉強になったし、励みになった。

4. 総括

学生からの評価は、講義の目標と合致している。

特に事前のグループワークと模擬授業直後の全体協議は、近年注目されている協働学習であり、アクティブラーニングでもある。協働学習の長所は、「他人の視点」である。たとえば、「授業力向上に役立つのは同僚からの評価と子どもからの評価」⁽⁹⁾という調査結果が出ている。

協働学習は、学びの深まりと共有化が図れる。アクティブラーニングは活性化が図れる。そして、これらを体験することを通して、各自が教員や社会人となったときにこのような学び方や学ばせ方を実践してほしいと考えている。

筆者は講評を最後に行う。それは様々な視点から出された意見、課題、疑問、評価等について「答えること」と同時に、それらの「問い自体」について考察させたいからである。問いについて「問いの視点」が適切であるか、「問いの内容」が適切であるか、吟味させたいと考える（それが些末なことか本質的なことか吟味できる力を育成したいと考える）。

課題としては、全体協議の時間が短いということである。90分という講義時間の中で、模擬授業が45分であるので、残り45分で全体協議を行うということはタイトな時間である。今後は、制限時間内で効率よく協議ができるよう意識することを課題としたい。

時間を45分のフルサイズにしていることも評価につながっている。45分という時間がどのような時間であるのかは、やはり体験しなければわからない。ある授業は、短く感じ、ある授業は長く感じることもある。その違いは何かを実感してもらいたい。そこから初めて、目標と内容の

どこに課題があるのかとらえられる。児童の気持ちもわかる（「なぜ、つまりくのか？」⁽¹⁰⁾等）。低学年と高学年の違いもわかる。

レポート作成は、重要であると考えている。それは、全体協議において実に様々な意見が飛び交うが授業時間という制約から、それらについて議論され尽くすことはできない。また、時間をおくことで意見や考えを深めたり、整理したりできる。発言による議論に加えて、文章化することでもう一度振り返ることができる。

講義担当者への提出のみでなく、授業者（授業グループ）にも提出する理由は、授業者（授業グループ）にとって再度客観的視点を文書によって振り返ることができるからである。

課題としては、レポートを担当グループだけではなく、全員で共有できればと考えている。これにはICT活用による共有の方法を考えていきたい。

おわりに

模擬授業は実践的内容である。一方で初等算数科指導法は、現在区分としては講義科目である。他教科も同様である。演習科目ではない。これは現在のカリキュラムとしては実態と一致しているとは言い切れない。

しかし、最も実践に近い教科科目が指導法であるために、「現実問題」として模擬授業を授業構成要素として取り入れられているのである。現実問題とは、教員の実践力向上という課題である。背景には、20～30年前と異なり、教師に対する評価が変化したことが大きな要因である。これは他の職業も同様である。昔は新任に対しては、大学で理論を学び、実践は現場で育てるという意識が強かった。社会全体がそのような意識であった。先輩教師も子供も保護者も新卒を育てた。

今は採用されたのならば新任であっても一人前のはずだということからスタートしている。そのような社会的状況においては、大学は理論だけでよいという考えは一部の大学や学部を除き、通用しない（採用試験についても実践力重視の内容である）。そのため大学では理論だけではなく、実践力も養わなければならない時代である。一般の職業においても同様である。以前は存在しなかったインターンシップ（就業体験）を大学が行っているのが、その表れである。

このような状況において、大学として講義科目であっても前述の通り、実践力養成のカリキュラムを整える必要がある。指導法の講義は、内容と方法は多様であってよいが、その実践力養成という目標にかなった内容と方法であるか、今後、さらに議論され検討されることが期待される。

（引用文献）

- (1) 横須賀薫（2010）「新版 教師養成教育の探究」春風社p.91
- (2) 剣持勉（他編）（2006）「初任者必携シリーズ4「教師力」を育成する算数科授業入門」明治図書p.14
- (3) 教師養成会（2011）「教育実習の研究 三訂版」学芸図書株式会社p.106
- (4) 田中耕治（編）（2007）「よくわかる授業論」ミネルヴァ書房p.111
- (5) 田中耕治（編）（2007）「よくわかる授業論」ミネルヴァ書房p.111
- (6) 佐々木昭（1997）「授業研究の課題と実践」教育開発研究所p.112

- (7) 矢部敏昭 (2005) 「「一人学び」をめざし新しい算数の学習」明治図書 p.145
- (8) 坪田耕三 (2004) 「算数「授業研究」再考」東洋館出版社 p.28
- (9) 横浜市教育センター (編著) (2009) 「授業力向上の鍵」時事通信社 p.137
- (10) 小島宏 (2005) 「算数授業 つまずきの原因と支援」教育出版 p.5

(参考文献)

- (1) 日俣重光 (他) (1974) 「授業の基礎技術2 授業の見方・考え方」明治図書
- (2) 青木幹勇 (他) (1974) 「授業の基礎技術3 教材の解釈と発問」明治図書
- (3) 阿部浩一 (他) (1975) 「授業の基礎技術9 発問分析による算数科授業の改善」明治図書
- (4) 阿部浩一 (編) (1980) 「教育大学教科教育講座5 算数・数学科教育の理論と展開」第一法規
- (5) 平山満義 (編著) (1997) 「質的研究法による授業研究」北大路書房
- (6) 日本私立大学連盟 (編) (1999) 「大学の教育・授業を考える1 大学の教育・授業をどうする」東海大学出版会
- (7) 野崎栄一郎 (編) (2002) 「教育実践を記述する」金子書房
- (8) 今泉博 (他) (2004) 「若い教師のステップアップ3 授業力」旬報社
- (9) 全国算数授業研究会 (2004) 「算数授業研究シリーズXIII 今、算数の授業で何が大切か」東洋館出版社
- (10) 宇佐美寛 (2005) 「授業研究の病理」東信堂
- (11) 子安潤 (他編) (2006) 「学級の教育力を生かす吉本均著作選集4 授業の演出と指導案づくり」明治図書
- (12) 子安潤 (他編) (2006) 「学級の教育力を生かす吉本均著作選集5 現代教授学の課題と授業研究」明治図書
- (13) 市川千秋 (監修) (2007) 「授業改革の方法」ナカニシヤ出版
- (14) 西園芳信 (他編著) (2009) 「教育実践から捉える教員養成のための教科内容学研究」風間書房
- (15) 阪神地区私立大学教職課程研究連絡協議会 (編) (2010) 「教師を育てる」ナカニシヤ出版
- (16) 細水保宏 (2011) 「細水保宏の算数教材研究ノート」学事出版
- (17) 日本教育工学会 (監修) (2012) 「教育工学選書6 授業研究と教育工学」ミネルヴァ書房
- (18) 石井康博 (2013) 「小学校算数科で利用されてきた具体物」関西大学出版部
- (19) 市川伸一 (編著) (2013) 「「教えて考えさせる授業」の挑戦」明治図書
- (20) 日本教育方法学会 (編) (2014) 「教育方法43 授業研究と校内研修」図書文化